見聞録

奈良

すっきり　ワイドに　地域面

陶芸家・富本憲吉の古里（安堵町）

生家は小さなホテルに

窯跡で孫弟子が創作

奈良市登大路町の県立美術館で「富本憲吉入門」と銘打った企画展が開催されている。文化勲章受章の富本（1886～1963年）は安堵町の豊かな旧家に生まれた。生家はホテルに生まれ変わり、かつて富本が窯を構えた地では孫弟子にあたる陶芸家の夫婦が制作にいそしんでいると聞いた。富本芸術を育んだ安堵町に行きたくなった。【大川泰弘】

富本は美術品に親しんだ父親の影響もあって東京美術学校（現東京芸大）の図案科に進んだ。今でいうデザインだ。主に建築内装を学んだ。ひょんなことから陶芸の道へ。親交を深めた英国人陶芸家、バーナード・リーチが楽焼を学ぶことになり、通訳を頼まれた。やってみないと訳せないと一緒に入門したことがきっかけだった。

各地の陶芸を貪欲に学んだ。朝鮮半島で李朝白磁を学び、信楽焼を近江で、肥前波佐見焼は長崎で学んだ。安堵では実家に焼成温度の低い楽焼の窯を最初に作った。結婚後、実家の東約200㍍に新居と本格窯を構えた。

安久波窯は、その新居跡にある。田中茂さん(65)と妻の坂手春美さん(64)が創作を続けながら陶芸教室で指導に当たっている。2人とも大阪市出身。京都市立芸大で陶芸を学んだ時、富本の弟子の近藤豊教授に薫陶を受けた。

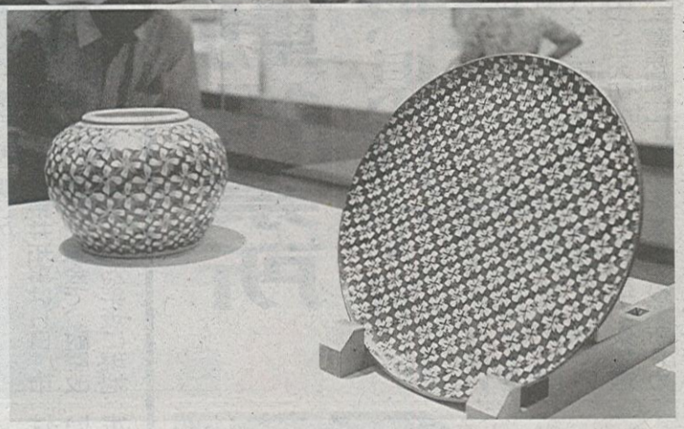
田中さんにとって富本は別世界の人物。「近藤先生と酒を飲んでいた時に呼び捨てにしたらひどく叱られました」と振り返る。「富本先生の模様はきれい。毛の跡が感じられるタッチに味わいがある。陶芸は伝統技術を伝承して窯のブランドで世に出すのが普通。先生は近代芸術として陶芸に取り組んだ最初の人」と称賛する。坂手さんも「ご自身のセンス、品の良さを感じる」とたたえる。日本で一番の陶芸家を尋ねたら「富本先生」と即答した。

「模様から模様をつくるべからず」という富本の有名な言葉がある。既存の模様によらず葉や花、風景から独自の模様を生み出した。テイカズラの花から生まれた「四弁花」が名高い。シダの葉の連続模様は完成に1年かかったという。

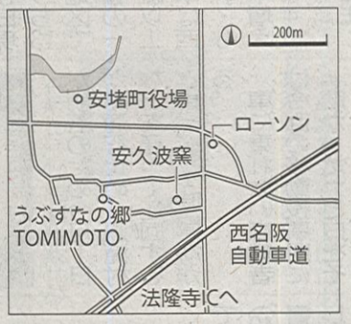
ホテル「うぶすなの郷（さと）　TOMIMOTO」に生まれ変わった生家は、かつて移築した長屋門の前に池がある。木造の母屋に食堂と客室。2階建ての蔵をメゾネットの客室に改修した。1日2組まで。2食つきで1泊5万円から。食事は、旬の食材を生かした和食を提供している。

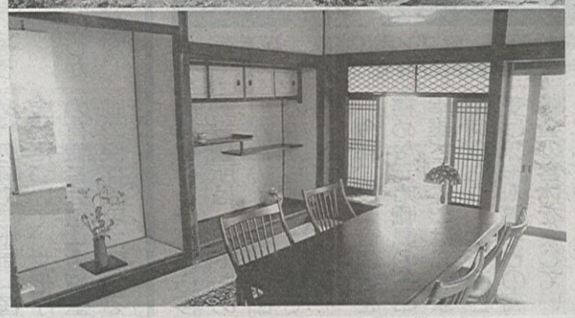
富本が使っていた部屋が客室になっており、窓から庭が見える。棚の小さなふすまに富本のデッサンが貼ってある。寝室は別にあり、いわゆるスイート。案内してくれた吉田雄哉主任は「ゆったりした時間とおいしい料理が当ホテルの魅力。チェックインしたら出かけないお客さまが多いですね。何もしないぜいたくです」と話す。

残念ながら安堵町で見られる富本作品は少ない。町役場の玄関ロビーに何点かが飾られている。富本芸術を堪能するなら県立美術館で開催中の企画展をお勧めする。



上自作を示す陶芸家の田中茂さん（右）と妻の坂手春美さん＝安堵町東安堵の安久波窯で　中富本作品の飾り坪と皿。テイカズラを図案化した模様が描かれる＝奈良市の県立美術館で





上生家の母屋には食堂と客室1室がある。手前のササが生えた所にかつて楽焼窯があった　下生家にある富本憲吉の部屋はホテルの客室になっている。宿泊予約がない時は食堂に＝いずれも安堵町の「うぶすなの郷　TOMIMOTO」で

◇県立美術館企画展・富本憲吉入門　9月1日まで。奈良市登大路町の同館。小題は「彼はなぜ日本近代陶芸の巨匠なのか」。生い立ち、大和、東京、京都の4時代と「くらしを彩る」の5章構成で163件を展示。一般400円、高大生250円、小中学生150円。月曜休館（祝日の場合は翌平日）。